

保育者養成課程における乳幼児発達の専門的視点の獲得 —5領域に関する「気づき」の縦断的变化に着目して—

山本 信 (聖和学園短期大学)

キーワード：保育者養成、乳幼児発達、学習成果

問題と目的

「子ども理解」は、保育における専門的スキルの一つとして位置づけられている。しかし、保育者養成課程において、子ども理解に関する「知識の活用」について客観的な手法により把握することは容易ではない。本研究では、実際の幼児の姿を捉えた映像を用い、学生の乳幼児発達に関する専門的視点の獲得や学習成果を定量的に測定するための探索的検討を行った。

方法

調査対象者 保育者養成校の学生 106名。

調査時期 2018年4月(1年次前期初回授業)および、2019年9月(2年次後期初回授業)。

材料・手続き 子ども(1歳11ヶ月, 男児)が遊んでいる場面を捉えた1分半程度の映像を観てもらい、「気づいたこと」(3つまで)を記入する形式で行った。

Table 1 使用した映像の詳細

時間	S児の行動と周囲の状況
0:00	猫を見て、強い口調で「ピース(猫の名前)」と言う(言語, 感情)
0:08	猫から視線を外し、ラジコンのリモコンを両手で持ち、再度「ピース」と言う(身体・言語・感情)
0:15	撮影者(S児の父親)に「○○(S児の名前)、クルクルして」と声をかけられる(言語, 社会)
0:24	撮影者の方を見た後、ショベルカーのアームを動かす(身体)
0:28	「あ」と言い、別のレバーを操作してショベルカーを回転させる(認知, 身体)
0:28	撮影者を見て微笑みながら「クルクル」と言う(感情, 言語, 社会)
0:28	猫に一瞬目を向ける
0:38	何度か、リモコンを操作して、ショベルカーを回転させる(身体)
0:38	ショベルカーのアームを動かしながら、猫を数回見る(身体, 社会)
0:50	(猫が去る)
0:55	ショベルカーを見て、指を指し触りながら「あ、ブルドーザー、ブルドーザー、ブルドーザー」と言い、撮影者を見る(認知, 言語, 社会)
1:04	「ブルドーザー」と言いながら、左手でリモコンを床(自分の左後ろ)に置く(言語, 身体)
1:08	右手でアーム、左手でショベルの部分を持ち、アーム部分を動かす(身体, 認知)
1:10	左後ろに振り返り、リモコンに手を伸ばして、アームを動かす(身体)
1:10	リモコンから手を離し、ショベルカーのアームに両手で触れる
1:13	撮影者を見て、「できない」と言い、手足を動かす
1:13	「できない」と言いながら、座ったまま、手をつきながら後ろに倒れ、泣き続ける
1:27	(動画終了)

結果と考察

「気づき」の数とその変化 一人あたりの「気づき」の数は、1年次は2.58個($SD=0.60$)、2年次は3.00個($SD=0.00$)であり、 t 検定の結果、1年次と2年次の「気づき」の数の差は有意であった($t(95) = 6.70, p < .001$)。また、1年次、2年次における回答の偏りは有意であり($\chi^2(4, N=536) = 26.99, p < .001$)、2年次の「人間関係」が有意に多く、1年次の「人間関係」が有意に少

なかった(Table 2)。

Table 2 領域毎の気づきの数

	健康	人間関係	環境	言葉	表現	計
1年次	12 (9.3)	6 (23.1)	73 (69.4)	99 (91.6)	58 (54.6)	248
2年次	8 (10.7)	44 (26.9)	77 (80.6)	99 (106.4)	60 (63.4)	288
計	20	50	150	198	118	536

注)括弧内は期待度数

「気づき」の内容 吉田ほか(2018)の「気づき」の段階に基づき、記述の内容について表面的な現象のみについて記述したものを1点、子どもの内面や行動の背景について記述したものや知識・経験等に基づいた推察まで記述しているものを2点とした。各領域の記述について平均得点を算出した結果、2年次の得点が1年次の得点を上回り($t(515.14) = 8.56, p < .001$)、領域「環境」($t(124.74) = 5.18, p < .001$)、「言葉」($t(167.23) = 4.82, p < .001$)、「表現」($t(113.61) = 3.43, p < .01$)であった(Table 3)。

Table 3 領域毎の平均得点

	全体		1年次		2年次		t 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
健康	1.30	0.47	1.25	0.45	1.38	0.52	0.57
人間関係	1.56	0.50	1.33	0.52	1.59	0.50	1.19
環境	1.27	0.45	1.10	0.30	1.44	0.50	5.18***
言葉	1.25	0.44	1.11	0.32	1.39	0.49	4.82***
表現	1.37	0.49	1.22	0.42	1.52	0.50	3.43**
全体	1.32	0.47	1.15	0.35	1.46	0.50	8.56***

*** $p < .01$ ** $p < .001$

本研究では、1年次と2年次における「気づき」の量的・質的な差が捉えられた。すなわち、保育者養成課程における、行動の背景や子どもの内面など保育者としての「目に見えない気づき」の萌芽や、獲得した知識を実際の子どもの姿へ応用する力の育ちを、子どもの映像を用いて客観的な数値として可視化することのできる可能性が示唆された。今後は、同じ映像を用いて、現場で働いている保育者の「気づき」についてデータを収集・分析することにより、保育者養成課程における学びや気づきが保育現場にどのように活かされているか、また、養成課程における専門的視点の獲得プロセスや、教育の実践・展開方法について検討を重ねていく。

引用文献

吉田満穂・中川智之・片山美香(2018). 保育実践における保育者の気づきの意味 兵庫教育大学教育実践学論集, 19, 75-85.